

前近代アラブ・イスラーム社会における〈同性愛〉 概念の誕生

辻, 大地

<https://hdl.handle.net/2324/7165088>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	辻 大地		
論文名	前近代アラブ・イスラーム社会における〈同性愛〉概念の誕生		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 清水 和裕
	副査	九州大学	准教授 小笠原 弘幸
	副査	九州大学	准教授 今井 宏昌
	副査	九州大学	名誉教授 岡崎 敦

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、9-15世紀のアラブ・イスラーム社会において、〈同性愛〉という概念が誕生した過程を、序章と終章を含め全6章から明らかにしたものである。イスラーム社会では、一般にイスラーム法によって同性愛が禁じられているとされている。しかし、歴史的には男性同士の性愛が文学などに頻出しており、一定の寛容な態度がみられる。本論文は、このような状況を歴史学的に理解するべく、同社会における同性間の性愛のあり方を文献学的に明らかにするとともに、構築主義的な研究において「近代の産物」とされた「同性愛概念」に近似するものが、同社会においては15世紀までに形成されることを明らかにした非常に精緻な研究であり、高く評価される。

序章では、セクシュアリティにまつわる研究と、イスラーム社会の歴史学的研究の両面から同性愛に関する研究史を整理し、構築主義的理解によって19世紀に「同性愛」という「性質」をもつものが受容されたとする従来のテーゼに対して、西洋社会とは全く異なる展開を見せるアラブ・イスラーム社会にそのテーゼを安易に適用することの問題性を指摘する。

第1章では、前近代のイスラーム法と医学という理念的な面からこの問題を概観する。法学上は同性間での性愛関係や行為への強い忌避が示されつつも、実際の法運用においては、同性愛的「行為」の有無と、その際の能動側／受動側の役割や行為者の社会的立場が重要視された。医学では、行為における受動側の者のみが生得的な「病」の状態にあるものとして扱われたことを確認する。

第2章では、9世紀に記された文学作品から、当時の性愛の場において重要であったのは、身体的性ではなく成人男性と「非・成人男性」という区分であり、各々の性交時における能動と受動の役割であった。さらに、ここで明確化された挿入（能動）側としての成人男性と、被挿入（受動）側としての「非・成人男性」という可変的で曖昧な構造は、当時のイスラーム社会に通底していた「男らしさ」観によって成り立っていたことが主張される。

第3章では、特に11世紀までの「異性装」を題材に、「男らしさ」観念とそれを放棄することによって得られる「女らしさ」の関係が示され、また、成人男性でありながら女性的に振る舞う「ムハンナス」という存在が、性的アイデンティティと性的指向を自認して描かれる事例を指摘した。

第4章では、9世紀のアッバーダという人物に付される言説から、ムハンナス概念の変遷を示す。初期には逸話集に現れるその人物像が、医学知識の普及、史書への組み込みによる「史実化」といった言説上の変化のなかで変化し、彼個人の「特徴」・「行為」に関する描写が、性的受動性という「性質」に結びつけられる様子を明らかにする。これによって「ムハンナス」の語が、ただ女性的に振る舞う者という理解から、本質的に性愛において受動側を指向する者を指すようになる。これは、特定の性的行動を、その

人物の「性質」として理解する〈同性愛〉的概念の成立を示す。

終章では上記内容がまとめられ、近代に誕生した「同性愛」概念と類似した、イスラーム社会における〈同性愛〉概念の一端が、すでに15世紀までに誕生していたことを示した。

以上、本論文は、前近代アラブ・イスラーム社会における同性間の性愛の諸相と、それに対する社会の対応のあり方を明らかにしつつ、関連する様々な史料を動員して、特定の社会において同性間の性愛がなぜそのような理解されたのか、またその理解がいかに変容したのかを明らかにした極めて優れた研究である。その成果は、現代ジェンダー研究など諸方面にインパクトを与えるものである。以上により本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位に相応しいものと認める。